

<b>Title</b>	責任ある教会：明確なキリスト教的性格を持ち、より広い社会に関わる教会（イム教授への応答）
<b>Author(s)</b>	藤原，淳賀
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3：70-77
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5130">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5130</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## イム教授への応答

### 責任ある教会

——明確なキリスト教的性格を持ち、より広い社会に関わる教会

藤 原 淳 賀

### 序

本国際シンポジウムのテーマは、「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」である。一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、ラインホルド・ニーバーの思想に対する関心は著しく衰えた。それは東西冷戦が終わり、ニーバーが思索してきたコンテキストとは社会的状況が変わったということが大きい。ニーバーは古くなつたと考えられた。またニーバーの「人間の本性」のなかで前提とされたプライドの問題にも一因がある。女性学、女性神学の発展とともに、「男性の問題としてプライドはあつたかもしれないが、女性たちはもつと女性としてのプライドを持つべきである」という議論が生まれてくるなかで、ニーバーの主張はもはや時代遅れであると考えられた。しかし今世紀に入り、神学者ではなく政治家、政治学者、社会学者の間でニーバーが再び議論されている。

私は、ジョン・H・ヨードー、スタンリー・ハワーワスらの神学を注意深く学んできたが、彼らが最も厳しく批判するのがラインホルド・ニーバーである。しかし二〇〇四年に聖学院大学に移ってから、私はラインホルド・ニー

バーのキリスト教現実主義にも注意を払うようになってきた。(聖学院大学総合研究所には、ラインホルド・ニーバー研究センターが作られた。)H・リチャード・ニーバーが『啓示の意味』においてカール・バルトとエルンスト・トレルチの橋渡しを試みたように、ヨルダーやハワーワスの明確なキリスト教的アイデンティティーを持ったビリーバーズ・チャーチの伝統とラインホルド・ニーバーの一般的な政治的・状況的におけるキリスト教的な倫理的考察の二つの神学的伝統に橋渡しを試みることは有益なことであると考えようになったのである。

二〇一二年の二月、デューク大学神学部でスタンリー・ハワーワス教授とお会いした。彼の自伝的著作『ハンナの子』を彼の研究室で戴いた際に「私以上に私のことをよく知っている淳賀へ」とサインしてくださったことを嬉しく想い出す。その年出版された私の博士論文を差し上げていたのだが、彼の神学思想をよく理解していると評してくださった。ただハワーワス教授は、私がその後、彼の神学とラインホルド・ニーバーの神学の橋渡しを試みていると知り、彼のキリスト論とニーバーのキリスト論とを同時に保持することができとは思わないのだが、と唯一の懸念を示された。

このような二つの思想を繋ぐという試みは野心的な、また困難なものであるかもしれない。しかし教会とは本来どのような存在で、またこれからどのように社会に関わっていくべきかを考えるときに、「明確なキリスト教的性格を持ち、より広い社会に関わる教会」が必要であると思うのである。

ここで現在の私自身の神学的方向性に触れたのは、建設的に日本のシンポジウムにおける議論を進めていくためである。というのもイム・ソンビン教授も彼の「エキュメニカルな社会倫理」においてそのような道を探っておられるように思えるからである。

## 「エキュメニカルな社会倫理」について

イム教授は、ハンティントンの「文明の衝突」とハラルド・ミュラーの「文明の共存」という概念に触れられている。そして「グローバル倫理」を紹介され、それに勝るものとしての「エキュメニカルな社会倫理」を紹介されている。この「エキュメニカルな社会倫理」がイム教授にとつては鍵となる思想であると考えられるため、まずこれについてイム教授が書かれているものを、「グローバル倫理」との対比において以下にまとめた（次頁表）。

イム教授の議論において重要なのは「グローバル倫理」が文明の衝突へと我々を導きかねないのに対し、「エキュメニカルな社会倫理」はその文化的敏感さのゆえに文明の衝突を避ける助けとなるということであろう。

これらの記述を見ると、我々の多くは「エキュメニカルな社会倫理」をグローバル倫理に代わる、より好ましいものとして見るであろう。しかしイム教授は「エキュメニカルな社会倫理」を明確に定義されていない。そのことは大変に残念である。例えて言うなら、「それは丸くて、柔らかく、また苺のような香りがします。片手で持つこともできます。食べることもできますが、すぐに食べないと消えてしまいます」と言っているような感じである。それが、「サーティーワン・アイスクリームのヴェリー・ベリー・ストロベリー・アイスクリーム」だとわかるときに、何が語られていたのかはつきりし、それについてより明確に議論することが可能になる。「エキュメニカルな社会倫理」ということばは、様々な人々が少なくとも一九三七年くらいから用いていると思う。イム教授がこの語をどのような意味で使っているのかを（特にその理論的基盤、限界、また有益に用いていくために必要な条件を含めて）明確にしてくださると建設的な議論ができるであろう。

グローバルな倫理	エキュメニカルな社会倫理
<ul style="list-style-type: none"> <li>- グローバルな倫理のために引用されたユネスコの5つの提案とキュンクの5つの提案の言及あり。(p. 46)</li> <li>- 「多様な宗教や文化に共通する基盤を基としている」。(p. 46)</li> <li>- 「世界大の連帯を可能にするような倫理」。(p. 46)</li> <li>- キュンクが提案したグローバル倫理は「宗教の性格や信仰構造の違いを真摯に考えるほとんどの神学者たち」は受け入れていない。「罪と恩寵の問題が欠落している」ため。(pp. 46-47)</li> <li>- 「さまざまな宗教が同じ標準で測れないということを深刻に考えないでグローバルな問題を解決しようとする」。(p. 47)</li> <li>- 「異なる宗教的伝統間の違いを深刻に考慮せずに問題を解決しようとする」。(p. 48)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 「聖書の歴史と福音の中心であるイエス・キリストと教会の伝統に基づく」。(p. 47)</li> <li>- 「現実主義的であるよりも保守的」。(p. 48)</li> <li>- 「グローバルを超えて普遍的」。(p. 48)</li> <li>- 「地上を超え普遍的」。(p. 47)</li> <li>- 「聖書の中核的な教えに従って、周辺に迫いやられた人々との連帯と責任の必要性に敏感」。(p. 48)</li> <li>- 「それぞれ（異なる宗教）の伝統の特殊性をより真摯に考える」。(p. 48)</li> <li>- 「社会的責任と聖書の教えに基づく一致の必要性に敏感」。(p. 47)</li> </ul> <p>.....</p> <p><b>課題について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「ハンティントンが正しく捉えている」グローバリゼーションの6つの課題をエキュメニカルな社会倫理は持つ。(pp. 48-50)</li> </ul> <p>.....</p> <p><b>あるべき姿について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「原則として、聖書の物語とその頂点であるイエス・キリストの福音と教会の伝統に基づくべき」。(p. 48)</li> <li>- 「セクト的限界を克服し、人道的問題と調和し、聖書の物語と教会の伝統に基礎づけられた倫理的基準を満たすべき」。(p. 48)</li> <li>- 三位一体的モデルが適切であると考えられる。(p. 48)</li> <li>- 「エキュメニカルな文化の確立」を目標とする。「偶像礼拝的な絶対主義を否定すると同時にそれぞれの文化を尊重する」。(p. 51)</li> <li>- 「それぞれの文化の独自性と多様性を保護する」。(p. 51)</li> <li>- 「異なる文化の間で、より建設的な混成化を遂行する。また、自由に基づいた大胆な文化を追い求める」。(p. 51)</li> </ul>

\* 頁数は本書。

## 「教会が教会である」ということについて

議論の終わりの方で、イム教授は「教会が教会である」ということに触れられる（英文、ニーパー研究科研費報告書五三頁、本書六一頁）。この表現はきわめてバルト的な主張と考えられるのであるが、そのすぐ後に（しばしば神学においては矛盾すると考えられる）ラインホルド・ニーバー的な表現が特に説明も無く簡単に出てくる。「われわれがより責任をもつて機能し得る社会的コンテキストを理解して分析することが必要である」（私訳、傍線は筆者による）。

既に「エキュメニカルな社会倫理」という語が不明確であるということを申し上げたが、更にこの幾分不明瞭な言明がここに加わってくる。これによって有益な社会的関わりを教会が実際に持ち続けていくことが可能なかどうかを判断することは難しいと言わざるを得なくなるのである。

今までの韓国長老会神学大学校の先生方との交流経験から、おそらくイム教授は、韓国のプロテスタント教会はその規模は大きいのであるが、主に教会の中にとどまり、基本的に霊の救いのことにのみ集中してきたことに憂いを感じておられるのではないかと推察する。韓国のプロテスタント教会は現在、社会にいかにも適切にまた有益に関わることができるかということを論じる「パブリック神学」に深い関心を持つていると私は理解している。そして韓国の教会はまた伝統的な神学的立場と明確なキリスト教的アイデンティティーを保持するということを前提としていると思う。しかし、もし明確なキリスト教的アイデンティティーと有益な社会的関わりを適切に行おうとするなら、我々の前の世代の議論——ヨルダーやニーバーによって行われてきた議論——をきちんと論じた上で前に進む必要がある。

ヨーダーはバルト的なケリグマティックな神学のラインに立つのだが、ニーバー的なアプローチを以下のように批判する。

（社会倫理は）そのガイダンスを常識や自然のものから引き出すであろう。我々は「ふさわしい」ものを、そして「適切な」ものを、「意義のある」ものをそして「効果的」なものを判定する。我々は、「リアリスティックで」そして「責任ある」ものになるであろう。これら全てのスローガンは、ある認識論を指し示しているのであるが、それに対する古典的レーベルは自然神学である。<sup>(2)</sup>

それらは、宗教改革期には職業倫理として現れ、ヨーダーの時代には状況倫理として現れたが、その構造は同じであるという。すなわち「何が正しいかを判断するのに、神からの宣言を聞くことによつてではなく、我々の周りのリアリティーの研究による」ということである。かくしてヨーダーは自然神学を退ける。<sup>(3)</sup>「世の光、キリスト」においてヨーダーは、自然神学、義戦論およびラインホルド・ニーバーの神学を批判するのだが、それはイエス以外に、理性、状況、創造の秩序といった他の権威を認め、最終的権威を自分の判断力に置くことにある。そこにおいてはイエスは、多くのアドバイザーの一人になるからである。

ヨーダーが戦っているのは、多くのアドバイザーの一つとして、様々な思想および世の知恵と並べて置かれた山上の垂訓に軽く会釈した後、現実の駆引きに入るような倫理学に対してである。<sup>(4)</sup>彼は言う。「もし誰かが、自らをキリスト者と任じ、しかしながらその他の啓示的権威に自らを委ねるとするなら、その選択を神学的に議論することは定義上不可能である」。

ヨーダーもハワーワスも「教会が教会ととならなければならない」ということを主張する。彼らの意味するところは、教会は、まず何よりも（他の何ものによつても行われることのない）教会にしかできないことに全力を尽くすべきであるということである。イム教授は韓国の教会が北朝鮮について人々に教育を施すということを書いておられるが、それは決して悪いことではない。しかしそのような教育は、教会以外でも地域の学校やミッション・スクール、カルチャーセンターでも行えるであろう。もしヨーダーやハワーワスの議論を念頭に置くなら、平和を作り出す民となるということ、またそのような人格を持つ人を生み出していくということが教会に最も期待されていることとしてあげられるであろう。

### 確固とした教会論の必要性

また「契約共同体」という言葉が急に出てくる（英文、同五〇頁、本書五七頁）。私自身は、教会とは契約共同体であるべきだと考えているので、このような思想は支持したいのであるが、イム教授がここで意味されている「契約共同体」とはどのようなものなのかを明確にしたいだけに更に有益な対話を持つことができるであろう。

イム教授はまたナシヨナリズムや排他的地域主義を克服することの重要性にも触れておられる（英文、同四八頁、本書五四頁）。これについても同意するものであるが、それらを克服するためには確固とした教会論が必要になつてくる。二つの世界大戦を含み、一九世紀以降、多くの国々の教会がナシヨナリズムに強烈な影響を受けた。もし日本の教会が、（例えば首相による靖国神社公式参拝を批判して）日本の排他的ナシヨナリズムに対峙することを求めるなら、そして韓国の教会が、（例えば大統領の竹島／独島上陸を批判して）韓国の排他的ナシヨナリズムに対峙することを求め



るなら、教会は我々の国籍がそこにある天の御国に属しているという明確なアイデンティティーを持たなければならぬであろう。

## 注

- (1) Yoshitumi Takahashi (ed.), *Reinhold Niebuhr and Christian Realism*, 31 March 2014. (Subsidized by JSPS KAKENHI, Grant Number: 23320025.) Contact Information: Seigakuin University General Research Institute.
- (2) John Howard Yoder, *The Politics of Jesus: Vicit Agnus Noster*, 2nd ed. (Grand Rapids: Eerdmans, 1994), p. 8.
- (3) その理由は以下の三つである。(1)キリスト教信仰はそのコンテキストにおいてのみ意味を持つということ。(2)自然法は教会と教会の連続性を前提としており、イエスの主権を認めない世の誤りを認めることができない。(3)暴力への戸を開く可能性を持つ。
- (4) John Howard Yoder, *The Original Revolution: Essays on Christian Pacifism* (Scottsdale, PA: Herald, 1971), p. 145. 上の文脈からプローチは、聖書に軽く会釈をした後(あるいは聖書も朗読せず)、それと関係なく自らの主張を述べる説教者に譬えられるかもしれない。